

# 中年期未婚女性におけるディストレスとソーシャル・サポート —若年期未婚女性との比較による検討—

大 風 薫\*

## Midlife single women's distress and social support:

Comparative study with younger aged single women

OKAZE Kaoru

### Abstract

It is very important for people to manage stressful events and chronic problems in their lives. Social support has been used widely to refer to the mechanisms by which interpersonal relationships presumably buffer one against a stressful environment. This study investigates the role of parents' social support in decreasing the relationship between some stressors, such as the condition of physical health, income, or unemployment, and midlife single women's distress. The sample data analyzed in this study is of never married women aged 35-54 years and is from the National Family Research of Japan in 2008. The results show that fathers' social support reduces distress of never married women in their midlife. Contrary to expectations, mothers' social support has no beneficial effect toward their daughters' distress. Additionally, a lower level of income for midlife single women affects their fathers' support negatively. These results indicate that in terms of mothers' support, life course similarity and frequency of contact play an important role in the levels of social support. Meanwhile, in terms of father's support, a proper amount of contact forms good relationships with their fathers.

Key words: Midlife single women, distress, social support, buffering effect, stressor

### I. 研究の背景と目的

平成22年度の国勢調査によれば、日本人女性の生涯未婚率は10.6%と、10年前の約2倍に達している。2030年時点におけるこの数字は23%と予想され（藤森, 2010）、結婚や世帯形成に対する意識や環境が大きく変化しつつあることがわかる。未婚者の増加は、世帯構造の変化をもたらし、政治や経済など多方面への影響が予想されるため、シングル単位のライフスタイルに着目した研究を進める必要がある。

未婚女性を対象としたこれまでの研究は、ステレオタイプに反論することを意図し、ことさら、シングルの立場の優位性を主張する研究が多かった（Gordon, 1994）。たとえば、自ら人生を切り開くことで得られる幸福感を宣言したり（Anderson & Stewart, 1994）、キャリアの充実が人生の満足感へつながる（Lewis & Border, 1995）といった主張があげられる。また、仕事と私生活の両面が充実したライフスタイルが確立されると、女性の結婚意欲は低下する（岩間, 1999）ことも明らかにされている。

しかしながら、メンタルヘルスの研究分野では、無配偶者のディストレスが高いことが示されてきた（稲葉,

---

キーワード：中年期未婚女性、ディストレス、ソーシャル・サポート、緩衝効果、ストレスサー

\*平成24年度 ジェンダー学際研究専攻

2002; 中澤, 2010)。この主な理由は、ディストレスの対処資源とされる配偶者からの精神的・経済的なサポートを享受できないからである (Williams et al., 2010)。日本の税制や社会制度は、女性が法律婚をして夫の扶養家族であることが前提となっているため、結果的に、未婚者は経済的に不利な状況にある。また、伝統的な価値観をもつ社会では、結婚することが当たり前といった圧力があるため、未婚女性は心理的な負担を感じやすく (大橋, 2003; Sharp & Ganong, 2007)、単身生活が長期に及ぶと、社会的な孤立のリスクもある (藤森, 2010)。つまり、未婚女性は、ライフスタイルを選択できる自由と、社会的基盤の脆弱さの間で、不安定な心理状態にあると推察できる。

これらの背景を踏まえ、未婚女性の心理状態がどのような要因によって影響されるのか、さらに、どのような要因が心理的な良好さをもたらすのかを検討することは重要な課題である。そこで本研究は、中年期の結婚経験のない女性に着目し、メンタルヘルスの状態を図る概念としてディストレスを用い、ソーシャル・サポートのディストレス緩衝効果を検討することを目的とする。同時に、どのような要因がディストレスを規定するのかについても検証する。

中年期を対象にする理由は、以下の3点である。①未婚状態が長期化すると、人生に対する不確実性が一層高まり (Sharp & Ganong, 2007)、メンタルヘルスが低下すると予想される。②中年期は人生の充実期という認識によって、従来のライフコース論の盲点になっているため、研究の蓄積が少ない (石川, 1996)。③女性にとって中年期は、社会的な役割が変容する (Allen, 1989) ライフコースの転換点として重要なステージである。

石川 (1996) が示した中年期の定義は40歳から60歳にプラス・マイナス5歳であるが、本研究では、同じく中年期未婚女性に着目した Heimtun (2012) に依拠し、35歳から54歳と設定する。若年期の未婚女性についても中年期女性と同様の分析を実施し、年代による差異も検討していく。

個人の精神的な健康は、社会的な価値を生み出し、社会の活力になる。中年期の未婚女性もまた、社会の活性化を推進する重要な存在である。この研究は、これまであまり研究されてこなかった中年期の未婚女性について、何がメンタルヘルスの向上に資するのかを議論していく端緒と位置づけたい。

## II. 概念整理と理論モデル

稲葉 (2008) によれば、ディストレスとは、個人が経験する不快な主観的状态をさし、抑うつ、不安、身体的症候などの具体的な指標によって測定される。ディストレスを生み出す潜在的可能性のある環境的要因をストレッサーとよび、ディストレスが特定のストレッサーによって生じているときに、この環境と個人の間をストレスと呼ぶ。ストレスは、それ自体が変数として測定されることは少ない。

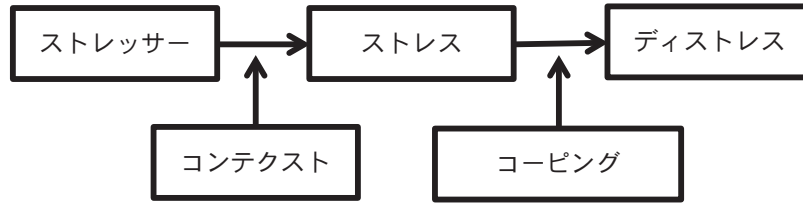
同一のストレッサーに直面しても、皆が同じようにディストレスを経験するわけではなく、ストレッサーの影響を小さくするような対処資源や対処能力によって、ディストレスは緩和される。対処資源の代表がソーシャル・サポートであり、ソーシャル・サポートがディストレスを緩衝する効果のことをバッファリング (緩衝) 効果と呼ぶ (Cohen & Willis, 1985)。ソーシャル・サポートは、対人関係から得られる支援であり、支援とは、その人の周囲にどのような良好な人間関係が存在するか、それによってどのくらいその人の心理状態が支えられているかという概念である (稲葉, 2008)。

以上の概念を踏まえ、本研究が依拠する理論モデルを示す (図1)。このモデルは、ストレッサーが、コンテクストの影響を受けてストレスとなり、ストレスへの対処に応じてディストレスが規定されることを示している。本研究では、この理論モデルの中で、ストレッサー、コーピングとしてのソーシャル・サポート、ディストレスの関係を分析していく。

## III. 先行研究と仮説

### 1. ストレッサー

ストレッサーには、ライフイベント (life event) と慢性的問題 (chronic stressor) がある (Pearlin, 1989)。ライフイベントは、一時的に発生するライフコース上の出来事である。慢性的問題とは、社会環境や役



出所：Wheaton and Montazer (2010)

図1 理論モデル

割の中にある日常的な問題である。本研究では、ライフイベントと慢性的問題の両面から、ストレスラーを検討する。

#### ① ライフイベント

Scully et al. (2000) による社会的再適応尺度では、各ライフイベントのインパクトの大きさが示されている。このインパクトによれば、本人の健康、身近な家族構成員の喪失がストレスラーになると考えられる。

#### ② 慢性的問題

社会経済的な地位が低いことは、慢性的なストレスラーになる (Brown & Scheid, 2010)。無業もまた自尊心や安心感を低下させ、心理面に負の影響をもたらす (Lennon & Limonic, 2010)。(財)年金シニアプラン総合研究機構 (2010) の調査結果からも、収入や就業状況は慢性的なストレスラーになると仮定できる。

### 2. ソーシャル・サポートとディストレス

配偶者や親、友人などの「重要な他者 (significant others)」によって提供されるサポートはディストレスを低下させる効果がある (Thoits, 2011)。大日 (2012) は、女性にとって、配偶者および配偶者以外のサポートも、ディストレスを低下させることを実証した。特に、サポートがディストレスの緩衝効果を示すのは、サポートを受ける側がサポートを受けていると認識できていること (Turner & Brown, 2010) であり、サポートを認識するには、サポート提供者との間に、良好な関係が築かれている必要がある (Turner & Lloyd, 1999)。

未婚者の主たるソーシャル・サポートは既婚者と異なり、親・きょうだい (澤口, 2006) や友人が中心となる (Barrett, 1996)。本研究では、日本における中年未婚者の親との同居率の高さに着目し、父親および母親によるサポートに着目する。具体的には、娘が親と関係性がよいと認識するほど、娘は親のサポートを実感すると仮定する。

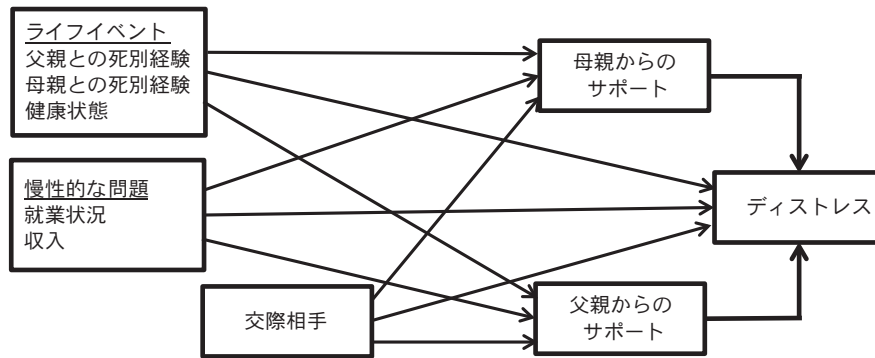
娘と母親の親密性については多くの研究が蓄積されており (たとえば Fischer, 1981; 中西, 2006)、娘は母親からのサポートを認識しやすいと想定できるだろう。父親についての研究は相対的に少ないものの、娘は、父親から支持的な関わりを受けていると認識すると、抑うつが低下する (大島, 2009) という知見がある。また、石井ケンツ (2013) においても、父親の愛情と子どもの成人後の精神的な幸福感に正の影響があると述べられていることから、父親もまた娘が認識しやすいサポート源といえるだろう。

### 3. ストレスラーとソーシャル・サポート

ソーシャル・サポートがディストレスの緩衝に効果を及ぼすことから、どのようなストレスラーがソーシャル・サポートの活性化や毀損に影響するのも検討する必要性が指摘されている (Taylor & Turner, 2004)。Brown & Scheid (2010) では、たとえば、社会経済的地位が低いことに代表される不利な社会的環境は、ストレス水準を高め、ソーシャル・サポートの利用可能性にマイナスの影響を与えるとされる。本研究においても、このような観点から、ストレスラーとソーシャル・サポートとの関係を分析に取り入れる。

### 4. 分析モデルと仮説の提示

本研究の分析モデルを図2に示す。具体的には、ディストレスを従属変数とし、父親と母親との関係性を媒介変数、各ストレスラーを独立変数として取り上げる。独立変数となるライフイベントには、父親・母親との死別経験、本人の健康状態を、慢性的な問題には、就業の有無、収入を仮定する。そして、父親と母親との関係性は、



注) 分析上、父親との死別経験と父親からのサポートにはパスをひいていない。  
同様に、母親との死別経験と母親からのサポートにはパスをひいていない。

図2 分析モデル

各ストレスラーによって規定される。なお、先にあげた独立変数のほかに、父親と母親のソーシャル・サポートに影響すると予想される交際相手の有無を変数に加える。Sarkisian & Gerstel (2008) は、特定のパートナーができる、子どもと親の親密性は低下すると述べた。交際相手の存在は、親によるソーシャル・サポートとの代替関係にあると予想されるため、分析に含む。

本研究における仮説は以下の通りである。①父親・母親と関係性がよいと、サポートを受けていると実感できるため、ディストレスは低減する、②ライフイベントや慢性的な問題は、ディストレスを高める要因になる、③ストレスラーの水準が高いと父親・母親との関係性が毀損され、サポートを認識しにくくなるため、その結果、ディストレスが高まる。

#### IV. 方法

##### 1. データ

本研究では二次データを用いた分析を行った。分析にあたり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから「第3回家族についての全国調査」の個票データの提供を受けた。同調査は2008年に全国の28-77歳の男女を対象として層化多段無作為抽出法による標本抽出を行い、2009年1月から2月にかけて訪問留置法による実査を行ったものである。有効回収標本は5,203名、有効回収率は55.4%である。分析対象の中年期女性は118名、比較対象の若年期女性（28歳から34歳）は124名である。対象者の中には、離別や死別などの理由から親不在の人も含まれる。

##### 2. 調査対象者のイメージ

本調査が対象とする中年期未婚女性の平均年齢は42.3歳である。年代は、30代49名、40代50名、50代19名に分布している。職業状況については、78.8%の人が就業しており、このうち、正規雇用者は63%である。約半数の人が正社員として安定的な職業についている一方、21.2%の人は無業である。平均年収は200万円から299万円にあり、女性給与所得者（正規・非正規を含む、平均年齢45.0歳）の平均給与268万円（国税庁，2013）に近い水準である。分布は、200万円以下が38.3%（うち収入なしは10.4%）、200から400万円が31.3%、400万円以上が30.4%となっている。

調査対象者の父親の平均年齢は72.1歳、母親は69.9歳であり、父親・母親ともに約8割の人が無職である。調査対象者本人の年収を含めた平均世帯年収は400万円から499万円にあり、本人年収と世帯年収の相関は高い（.68）。居住形態では、父親と同居している人が50.0%、母親と同居している人は68.6%となっている。親との関わりについて、父親とほぼ毎日のように「話らしい話」をする人は36.4%、母親では61.9%である。

以上のことから、本研究の調査対象者は、①中年期の中でもやや若い世代である。②収入のある仕事を持つ人

が多く、女性の平均的な給与を得ている。③父親・母親との同居割合やコンタクト頻度は比較的高く、父親に比べて、母親との接触が多い。④父親・母親の平均年齢は70歳前後と定年を過ぎているため、無職者が多い。⑤親単独の年収は不明だが、世帯年収の状況から年金生活をしている親が多いと予想できる。

### 3. 分析に用いた変数

ディストレス：最近1週間の心身の状態を査定することで抑うつを測定するCES-D (Center for Epidemiological Studies Depression) 尺度12項目を用いて合成変数として使用した(クロンバック  $\alpha = .855$ )。父親・母親からのサポート：「この方との関係は、いかがですか」という質問項目を用いた。「1. 良好」「2. どちらかといえば良好」「3. どちらかといえば悪い」「4. 悪い」の4件法で、1を4点と点数を反転させた。父親・母親との死別経験：「お父さん、お母さんの健在・死亡の別をご記入ください」という質問項目を用いた。親死亡を1、親健在を0としてダミー変数を作成した。健康状態：「あなたのこの1年間の健康状態は、おおむね、いかがでしたか」という質問項目を用いた。「1. たいへん良好」「2. まあ良好」「3. どちらともいえない」「4. やや悪い」「5. たいへん悪い」の5件法で利用した。就業状況：「あなたは、現在、収入をとまなう仕事についていますか」という質問項目を用いた。「1. ついている」を0、「2. ついているが休職中」「3. 今はついていないが、過去はついていた」「4. 仕事についたことはない」を1とし、ダミー変数を作成した。収入：「あなたの去年1年間の収入は、税込みではどれに近いですか。臨時収入、副収入、年金も含めてお答えください」という質問項目を用いた。「1. 収入はなかった」「2. 100万円未満」(中略)「15. 1200万円以上」までの15カテゴリーを、反転して用いた。交際相手：「あなたには現在、特定の交際相手または婚約者がいますか」という質問項目を使用した。「1. 現在、婚約者がいる」「2. 現在、特定の交際相手がいる」「3. 過去に特定の交際相手があったが、現在はいない」「4. 現在も過去も特定の交際相手はいない」というカテゴリーを、「1. 現在、婚約者がいる」「2. 現在、特定の交際相手がいる」を交際相手ありとして1、「3. 過去に特定の交際相手があったが、現在はいない」「4. 現在も過去も特定の交際相手はいない」を交際相手なしとして0を与え、ダミー変数を作成した。

### 4. 分析方法

記述統計とパス解析を実施した。欠損値は平均値で置き換え、分析モデルにもとづいてパス解析を実行した。パス解析を使用した理由は、緩衝効果を想定する親のサポートを媒介変数にできるからである。使用した統計ソフトは、SPSS21.0とAMOS19.0である。

## V. 結果

### 1. 記述統計量と中年期・若年期間の平均値の差

表1に分析結果を示す。まず、ディストレスのレベルに関しては、中年期と若年期の間に差異はなかった。この結果は、年代が高まるにつれ、ディストレスが高くなるとの予想とは異なり、年代別に、有配偶者と未婚者のディストレスを比較した稲葉(2002)の結果と同様の傾向であった。

父親・母親との離別経験率の相違では、中年期のほうが有意に高かった。中年期の平均本人年齢が42.3歳(若年期：30.7歳)、平均父親年齢72.1歳(61.3歳)、平均母親年齢69.9歳(若年期：58.4歳)によるものであろう。本人の健康状態についての差異はなかった。

就業状況では、若年期のほうが収入のある仕事についている人が多かった。中年期では、健康状態や家族の面倒などの理由から仕事を止める人が一定数いる((財)年金シニアプラン総合研究機構, 2010)ためと考えられる。年代間で就業状況の差があるにも関わらず、年収の差はなかった。本データで就業形態と職種を確認した結果、若年期では派遣社員の比率が中年期より高く、一方、中年期では若年期に比べ、管理的な仕事や専門的な仕事についている人の割合が多かった。その結果、平均年収の差異が縮小されていると考えられる。交際相手の有無については、若年期が有意に高かった。父親・母親との関係性についての差はなかったが、分布を確認したところ、いずれの世代も関係性はよいと認識する人が多数であった。

表1 記述統計量および中年期・若年期間の平均値の差

変数	平均		SD		Range		差	
	中年期	若年期	中年期	若年期	中年期	若年期	(中年期— 若年期)	有意確率
ディストレス	19.48	19.48	5.58	6.11	12-43	12-44	-0.002	0.998
父親との死別経験	0.34	0.08	0.47	0.25	0-1	0-1	0.262	0.000 ***
母親との死別経験	0.12	0.02	0.32	0.13	0-1	0-1	0.094	0.003 ***
健康状態	2.32	2.29	0.89	0.87	1-5	1-5	0.032	0.779
就業状況	0.21	0.09	0.41	0.30	0-1	0-1	0.115	0.014 *
年収	10.90	11.10	2.79	1.74	3-15	7-15	-0.168	0.576
特定の交際相手の有無	0.21	0.36	0.35	0.48	0-1	0-1	-0.152	0.005 ***
父親との関係性	3.42	3.45	0.65	0.76	1-4	1-4	-0.032	0.724
母親との関係性	3.61	3.74	0.57	0.46	1-4	2-4	-0.125	0.063

注 \* $p \leq .05$  \*\* $p \leq .01$  \*\*\* $p \leq .001$

## 2. パス解析

### ① 中年期未婚女性の結果

図3にパス解析の結果を示す。モデルの適合度は、GFI=.979、AGFI=.937、RMSEA=0.000であり、妥当な結果であった。ディストレスの緩衝効果を仮定した父親・母親との関係においては、父親との関係が良いほどディストレスを低下させるという結果であった。一方、母親との関係にはディストレスに対する効果が認められなかった。父親との関係を規定する要因では、年収が低いほど、そして交際相手がいると父親との関係は良好でなくなった。母親との関係を規定するストレスについて、有意な結果を示すものはなかった。ストレスとディストレスとの関連では、健康状態のみが有意となり、健康状態がよくないとディストレスが高くなるという結果であった。

### ② 若年期未婚女性の結果

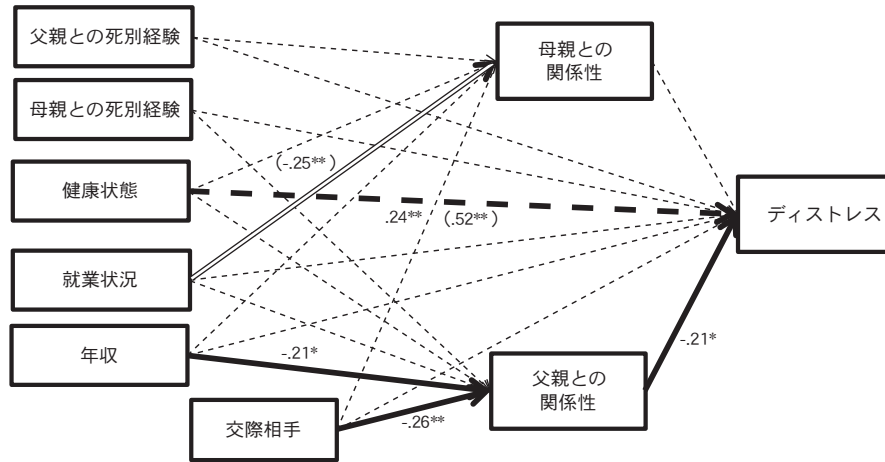
中年期女性と同様のモデルでパス解析を実施した(図3)。モデルの適合度は、GFI=.979、AGFI=.928、RMSEA=.000であり、妥当な結果であった。ディストレスの緩衝効果を予想した父親・母親との関係性については、いずれも有意な要因とはならなかった。中年期女性と同様に、健康状態は直接的にディストレスを低下させ、健康状態がよくないほどディストレスは高まることを確認された。また、就業していないと母親との関係が良くなるという結果が得られたが、父親との関係に有意な影響を及ぼすストレスはなかった。若年期の未婚女性では、父親・母親との関係はディストレスの低減に効果が認められず、健康状態がディストレスに及ぼす影響が大きかった。

## VI. まとめ

本研究は、未婚女性における、ディストレスに対する親のソーシャル・サポート効果、ディストレスを規定するストレス、ソーシャル・サポートを規定するストレスについて検討した。以下に、結論と考察を述べる。

### 1. 父親・母親によるソーシャル・サポートとディストレスの関係

母親のサポートはディストレスの緩衝効果がなく、父親のサポートには効果が確認された。母の効果が確認できなかったのは、本調査対象者が母親との接触頻度が高く、日常生活の中で、親密性と葛藤といった複雑な感情を抱いている(Lefkowitz & Fingerman, 2003)ためではないだろうか。つまり、娘にとって母親は、身近な相談相手としてサポート源になると同時に、娘の生活や価値観に干渉してくる重い存在(信田, 2008)にもなるため、ディストレスを低減させるほどの効果が見出せなかったかもしれない。特に、娘が母親に対して親密性を



注) 中年期女性の分析における有意確率 5%水準以上のパスは実線で示し、若年期女性における有意確率 5%水準以上のパスは二重線で示した。いずれの分析でも有意なパスは破線、有意ではないパスは点線で示した。若年期女性で有意になったパスの標準化係数は()をつけた。  
 中年期女性のモデル適合度  $N=118$ ,  $CMIN=11.513$ ,  $df=15$ ,  $p=0.715$ ,  $GFI=.979$ ,  $AGFI=.937$ ,  $RMSEA=.000$   
 若年期女性のモデル適合度  $N=124$ ,  $CMIN=12.180$ ,  $df=13$ ,  $p=0.513$ ,  $GFI=.979$ ,  $AGFI=.928$ ,  $RMSEA=.000$   
 \* :  $p \leq .05$ , \*\* :  $p \leq .01$ , \*\*\* :  $p \leq .001$

図3 中年期・若年期未婚女性のパス解析の結果

感じるのは、環境的要因よりも娘のライフコース志向が母親ライフコース志向と同じ場合であることも実証されている(中西, 2006)。中年期の独身の娘と母親の間にはライフコース上の類似性が少ないため、子どものいる娘が母親に感じるような親密さ(Fischer, 1981)を感じにくいことも推察できる。

母親とは対照的に、父親のソーシャル・サポートがデストレスの低下に効果を及ぼすことが明らかにされた。この結果は、娘が父親から支持的な関わりを受けたと認識することが、娘の抑うつを低下させる(大島, 2009)という先行研究の知見に合致する。本調査対象者の父親の多くは無職で、現役時代に比べて父娘間の日常的な接点は増えていると思われるが、母親ほどのコンタクトはなく、適度な距離を保ちつつ、良好な関係が築けているのかもしれない。特定の交際相手がいないと父親からのサポートを受けやすく、デストレスが低下するという結果は、父親のサポートと交際相手の存在が、代替関係になっていると解釈できる。この点からも、娘が、母親とは異なる父親ならではのサポートを受けている可能性が指摘できる。

一方、中年期では、親の健康状態が悪化すると、親の存在がデストレスを高める懸念もある。しかし、本分析では、その効果は見出せなかった。親の健康状態や介護状況を把握する変数がなく、明らかなことは言えないが、本調査対象者は、中年期の中でも比較的若い世代が多かったことから、親の介護問題を抱える人が少なかったものと推測される。

## 2. ストレッサーとデストレスの関係

ライフイベントと慢性的な問題の観点から仮定した5つのストレッサーのうち、健康状態とデストレスにのみ負の影響が見出された。親との死別経験は、人生上の大きな出来事としてストレスになると考えたが、時間の経過とともに衝撃がやわらぎ、デストレスに与える影響が小さかったと推察できる。健康状態は、身体上の健康感を表すため、デストレスに与える影響は大きいと想定され、予想通りの結果であった。就業状況や、収入のデストレスに対する直接的な効果が確認できなかったのは、本分析に取り込まなかった職業や収入によって得られる自尊心や自己統制感といった心理的要因が媒介する(Lennon & Limonic, 2010)可能性があるのではないかと考えられる。

### 3. ストレッサーとソーシャル・サポートの関係

ストレッサーとソーシャル・サポートの関係では、年収が少ないと父親のソーシャル・サポートを受けにくいことが確認された。親の年収は不明であるが、本人年収と世帯年収の相関が高いことから、娘と親は同じような経済環境にあると想像できる。この結果は、親子双方が経済的に不利な環境にあり、子が親からのサポートを受けられていない状況を表しているのではないだろうか。

### 4. 本研究の限界・課題・意義

本研究の限界として、サンプルサイズが小さいこと、親の緩衝効果を測定する変数が単一の尺度であることがあげられる。そのため、得られた結果の解釈を慎重に行う必要がある。また、未婚女性の親子関係には、親子の経済関係や子に対する親の意識、子の将来予定などの要因が影響する（宮本，2004）ため、他の説明変数も検討する必要がある。未婚者のソーシャル・サポートには、友人や知人といった他者の存在も重要と思われるため、これらのサポートがディストレスにどのような影響を及ぼすのか、親族との代替関係などについても検討していく必要があるだろう。

本研究は、これまであまり研究対象となることがなかった中年期の未婚女性のディストレスについて知見を蓄積できた点で一定の貢献はできたと考える。日本社会の構造的な変化を考える際、配偶関係や子どもの有無を問わず、あらゆる女性が活躍できる環境を構築する必要がある。中年期の未婚女性が担う社会的な役割は、今後ますます重要となるため、彼女らの精神的な健康を高める要因を探索することは、日本社会の活性化の一助になると考える。

### 【謝辞】

二次分析に当たり、東京大学社会科学研究所附属社会調査・データアーカイブ研究センターSSJデータアーカイブから〔第3回家族に関する調査（日本家族社会学会）〕の個票データの提供を受けました。貴重なデータをご提供くださったことに対して、ここに改めて謝意を表します。

### 【参考文献】

- Allen, K. R., 1989, *Single Women/ Family ties: life histories of older women*, Newbury Park: Sage Publications.
- Anderson, C. M. & Stewart S., 1994, *Flying Solo: Single women in midlife*, W.W. Norton, (= 2004, 平野和子訳『女たちの単独飛行 中年シングルをどう生きるか』新曜社.)
- Barrett, A., "Social networks and life satisfaction among the never-married," *Research on Aging*, 21(1):46-72.
- Brown, T. N. & Scheid L., S, 2010, "The Social Context of Mental Health and Illness," T. L. Sheid & T. N. Brown eds., *A Handbook for the study of mental health*, Cambridge, UK: Cambridge University Press, 163-170.
- Cohen, S. & Willis, T. A., 1985, "Stress, social support, and the buffering hypothesis," *Psychological Bulletin*, 98(2): 310-357.
- 大日義晴, 2012, 「配偶者サポートの独自性—NFRJ08データを用いた計量分析—」『家族社会学研究』24(2): 189-199.
- Fischer, L. R., 1981, "Transitions in the Mother-Daughter Relationship," *Journal of Marriage and the Family*, August: 613-622.
- 藤森克彦, 2010, 『单身急増社会の衝撃』日本経済新聞社.
- Gordon, T., 1994, *Single Women: On the margins?*, Hampshire: Macmillan Press. (= 2001, 熊谷滋子訳『シングルウーマン白書—彼女たちの居場所はどこ?—』ミネルヴァ書房.)
- Heimtun B., 2012, "The friend, the loner and the independent traveler: Norwegian midlife single women's social identities when on holiday," *Gender, Place & Culture: A Journal of Feminist Geography*, 19(1): 83-101.
- 稲葉昭英, 2002, 「結婚とディストレス」『社会学評論』53(2): 69-84.
- 稲葉昭英, 2008, 「ストレス研究の諸概念」石原邦雄編『改訂版 家族のストレスとサポート』財団法人放送大学教育振興会, 41-61.
- 石井クンツ昌子, 2013, 『「育メン」現象の社会学』ミネルヴァ書房.
- 石川実, 1996, 「中年期の発見」井上俊・上野千鶴子・大澤真幸・見田宗介・吉見俊哉編『ライフコースの社会学』岩波書店, 95-118.
- 岩間暁子, 1999, 「晩婚化と未婚者のライフスタイル」『人口問題研究』55(2): 39-58.
- Lefkowitz, E.G. & Fingerman, K. L., 2003, "Positive and negative emotional feelings and behaviors in mother-daughter ties in



- later life," *Journal of Family Psychology*, 17(4): 607-617.
- Lennon M. C. & Limonic L., 2010, "Work and unemployment as stressors," T. L. Sheid & T. N. Brown eds., *A Handbook for the study of mental health*, Cambridge, UK: Cambridge University Press, 213-225.
- Lewis, G. & Borders L. D., 1995, "Life satisfaction of single middle-aged professional woman," *Journal of Counseling & Development*, 74: 94-100.
- 宮本みち子, 2004, 『ポスト青年期と親子戦略 大人になる意味と形の変容』 勁草書房.
- 中西泰子, 2006, 「母娘関係の親密さとその規定要因—娘のライフコース志向と母親ライフコースの類似性に注目して—」『家族関係学』 25, 35-47.
- 中澤渉, 2010, 「男女間のメンタルヘルスの変動要因の違いに関する分析」『東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズ』 31: 1-20.
- 信田さよ子, 2008, 『母が重くてたまらない—墓守娘の嘆き』 春秋社.
- 大橋照枝, 1993, 『未婚化の社会学』 日本放送出版協会.
- 大島聖美, 2009, 「妻から夫への信頼感が青年期後半の娘の心理的健康に与える影響」『発達心理学研究』 20(4), 351-361.
- Pearlin L. L., 1989, "The sociological study of stress," *Journal of Health and Social Behavior*, 30(September) : 241-256.
- Sarkisian, N. & Gerstel, N., 2008, "Till marriage do us part: Adult children's relationships with their parents," *Journal of Marriage and Family*, 70: 360-376.
- 澤口恵一 (2006) 「中年期未婚者の福利とサポート・ネットワーク」澤口恵一・神原文子編『第2回家族についての全国調査 (NFRJ03) 第二次報告書No.2 : 親, きょうだい, サポート・ネットワーク』日本家族社会学会, 181-194.
- Scully, J. A., Tosi, H., & Banning, T., 2000, "Life event checklists: Revisiting the social readjustment rating scale after 30 Years," *Educational and Psychological Measurement*, 60:864-876.
- Sharp, E. A. & Ganong, L., 2007, "Living in the gray: Women's experiences of missing the marital transition," *Journal of Marriage and Family*, 69:831-844.
- Taylor, J., Turner, J., 2004, "A longitudinal study of the role and significance of mattering to others for depressive symptoms," *Journal of Health and Social Behavior*, 42:310-325.
- Thoits P. A., 2011, "Mechanism linking social ties and support to physical and mental health," *Journal of Health and Social Behavior*, 52 (2) :145-161.
- Turner, R. J. & Brown L. B., 2010, "Social support and mental health," T. L. Sheid & T. N. Brown eds., *A Handbook for the study of mental health*, Cambridge, UK: Cambridge University Press, 200-212.
- Turner, R. J. & Lloyd D. A., 1999, "The stress process and the social distribution of depression," *Journal of Health and Social Behavior*, 40 (4) :374-404.
- Wheaton, B. & Montazer, S., 2010, "Stressors, stress, and distress," T. L. Sheid & T. N. Brown eds., *A Handbook for the study of mental health*, Cambridge, UK: Cambridge University Press, 171-199.
- Williams, K., Frech A, & Carlson, D. L., 2010, "Marital status and mental health," T. L. Sheid & T. N. Brown eds., *A Handbook for the study of mental health*, Cambridge, UK: Cambridge University Press, 213-225.
- 財団法人年金シニアプラン総合研究機構 (2010) 『第3回 独身女性 (40~50代) を中心とした女性の老後設計ニーズに関する調査』財団法人年金シニアプラン総合研究機構.